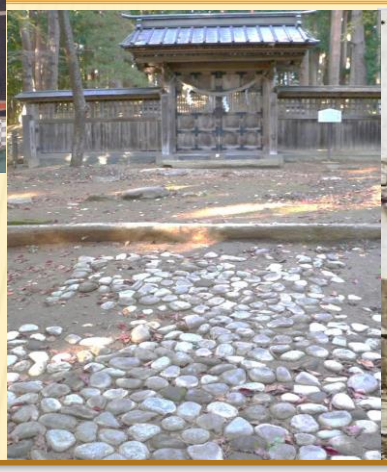
# 「保科正之公」について



**保科正之公　慶長16年(1611)5月7日生**

保科　正之（ほしな　まさゆき）慶長十六年（一六一一）五月七日生

江戸幕府の第二代将軍徳川秀忠の四男、母はお静の方（浄光院）。

幼少名「幸松丸」寛永二十年（一六四三）七月四日会津移封。

寛文十二年（一六七二）十二月十八日、江戸三田藩邸で死去。

享年六十二歳　「土津霊神」

二代将軍徳川秀忠は、正室のお江与の方に頭が上がらず、側室を持ちませんでしたが、秀忠は「お静」と親しくなり、生まれたのが「幸松」で後の保科正之です。お江与の方は、幸松を正式に認なかったので、見性院（武田信玄の二女）に預けられます。見性院は、学問と武芸の稽古のため、信頼のある信州高遠藩の保科正光に正之を託しました。

正之は、保科正光の養子となり、十八歳の時、徳川秀忠と極秘で初対面します。寛永八年（一六三一）二十一歳で藩主となります。秀忠は家光に正之の存在を話しませんでした。正之の異母兄徳川家光は、乳母の春日局に育てられ、お江与が可愛がっていた弟の忠長と後継者争いとなります。

元和九年（一六二三）徳川家康へ後継者について春日局が訴え、「長序の順」から家光が後継者となります。家光の将軍時の挨拶は「生まれながらの将軍である」と話したといいます。しかし弟忠長は、この恨みは深いものでした。自分の不行もあり改易処分を受け自害しています。また、家光は、自分を将軍後継者に指名した祖父家康への崇拝が強く、父秀忠が造営した日光の建物は改築し、日光東照宮を現在のような壮大な建物に造営したのです。家光が七歳下に、弟がいることを知ったのは、秀忠が死んだ後です。家光は、鷹狩りの最中、保科家の住職から話を聞き、対面しました。

家光は、正之を寛永八年（一六三一）に信州高遠藩三万石の藩主にし、寛永十三年（一六三六）に山形二十万石、寛永二十年（一六四三）正之三十二歳の時、会津藩二十三万石の藩主となります。

その後、正之は大老にまでなり、幕府の中枢として政治を行いました。

承応二年（一六五三）には、玉川上水の工事を開始します。

明暦三年正月十九日の大火（一六五七）のあと、道路を六間から、九間（一六.四メートル）に広げ、広小路を造り、芝と浅草に新堀を開設、神田川を広げ、経済活動の活発化を推進しました。万治二年（一六五九）九月一日、江戸城天守閣の再建は不要とし、財政再建にも努めました。


図・写真・文　©石田明夫2017　問合せ　TEL・Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索